



自己ベストの「裏側」

～ 町陸上記録会に臨むにあたって ～

明日の会津坂下町小学校陸上記録会（荒天の場合は順延）に向けて、5・6年生の子ども達は、自己ベストの更新をめざして練習に取り組んできました。子どもたちは、自分のベスト記録を更新する度に達成感を味わい、さらにより記録を出そうと意欲的に取り組む姿が見られました。

私自身を振り返ると、ベストを尽くして満足した経験よりも、上手くいかなかった時に言い訳を考える自分が多かった気がします。

ベストを尽くすというのは、裏側にもう一つの強さを必要とします。仮に失敗した場合、その結果を自分の実力として受け入れる強さを持つということです。そして、その結果を恥じないこと。陸上記録会に臨む子どもたちに、次のことを話しました。

一生懸命に努力したからといって、必ず良い結果が出るとは限りません。でも、一生懸命にやらなかったら何も残りません。一生懸命にやって、その時に出した結果は、その時の自分の“自己ベスト”。「ちょっと足が痛くて…」「もっと本気を出せば…」なんて言い訳は絶対にしないこと。

裏側のことを、人間の「内面」とも言いますが、大人の私も中々内面を磨ききれずにいます。子どもたちには、陸上記録会を通して、技能だけでなく「裏側」(心)も磨いてほしいと思います。



昼休みに自主練習に取り組むリレーチーム

昨日、6年女子リレーチームの子ども達から、「校長先生、リレーの練習をしたいので見ていただけますか」とお願いされました。バトンパスの課題を自分達で改善したいと一生懸命に練習する姿を見て、とてもうれしくなりました。

「ひび割れ壺」 (作者不詳 菅原裕子訳)

私が出合った心に残るお話を、数回に分けて紹介します。



インドのある水汲み人足は二つの壺を持っていました。天秤棒の端にそれぞれの壺を下げ、首の後ろで天秤棒を左右にかけて、彼は水を運びます。

その壺の一つにはひびが入っています。もう一つの完璧な壺が、小川からご主人様の家まで一滴の水もこぼさないのに、ひび割れ壺は人足が水をいっぱい入れてくれても、ご主人様の家に着くころには、水が半分になっているのです。

完璧な壺は、いつも自分を誇りに思っていました。なぜなら、彼が作られたその本来の目的をいつも達成することができたから。

ひび割れ壺は、いつも自分を恥じていました。なぜなら、彼が作られたその本来の目的を、半分しか達成することができなかったから…。 (つづく)



さて、この後、ひび割れ壺の話はどう展開していくのでしょうか。続きは次号以降で😊